高齢者住宅・スケボー場…廃校活用率、山梨1位・栃木3位

データで読む地域再生 関東・山梨

#データで読む地域再生 #山梨 #栃木

2023/1/6 21:00 [有料会員限定]

校庭に建設していた高齢者住宅がほぼ完成し、1月下旬から入居が始まる（栃木県那須町）

関東・山梨の8都県で廃校の活用が進む。市町村合併と少子化を背景に廃校が増えたものの、東京都心に近い立地と自然環境を生かし、観光施設や高齢者住宅を整備したり、オフィスに転用したりして雇用を生み出す事例もある。子供たちの学びの場が、観光客や高齢者らが集う新たなコミュニティーに生まれ変わりつつある。

データで読む地域再生

自然豊かな栃木県北部の那須町で、廃校を活用したコミュニティーづくりが着々と進む。高齢者住宅の整備・運営などをする会社「那須まちづくり」が2016年に廃校となった旧朝日小学校を町から借り、子供や高齢者、障害者ら老若男女が楽しく暮らせる施設を整備中だ。

校庭に建設した49戸の高齢者向け住宅「ひろばの家・那須1」を核に、介護サービスを受けられる「ひろばの家・那須2」や、終末期を過ごす「みとりえ」など、健康状態に応じて移れる施設も設けた。

映画の上映やコンサートを開けるホールや食事を提供するカフェ、野菜などを販売するマルシェなどは校舎を改修して整備した。ひろばの家・那須1は約40戸が契約済みで、1月下旬から入居が始まる。

那須町はほかにも廃校を学童や福祉施設、アートと観光の複合施設などに転用している。「新たな雇用を生み出すとともに、地元の住民も利用できる施設にしたい」（同町総務課）

廃校になった小学校を活用して2018年に開業した山村留学施設「くらぶち英語村」（群馬県高崎市）=高崎市提供

群馬県高崎市は18年4月、過疎化で廃校となった小学校跡に木造2階建ての山村留学施設「くらぶち英語村」を開いた。県内外の小中学生が1年間、保護者のもとを離れて英語を母国語とするスタッフと共同生活しながら、農作業やハイキングなどの課外活動を通して「生きた英語」を学ぶ。

英語村がある倉渕地区は06年に高崎市に編入された旧倉渕村の山間部地域。過疎化で学校が再編された。現在は東京や大阪などから集まった5期生の22人が、地元の小中学校に通いながら施設で共同生活を送っている。

年間100万円程度の費用がかかるが、入学倍率は5倍に達するほど人気で、「全国各地から視察も相次いでいる」と担当者は話す。

屋内プールを改装したスケートボードパーク（山梨県北杜市）

廃校活用率が全国1位の山梨県では、北杜市が地域の合意を得て活用する制度を設けている。廃校を活用する企業・団体の選定では、地元との協調関係の構築や事業の安定性を評価項目とする。

選定された地元NPOが運営するのが「八ケ岳コモンズ」。教室はコワーキングスペース、屋内プールはスケートボードパークに生まれ変わった。理科室は家具メーカー「ナハティガル」の工房兼本社となった。ナハティガルの梶本聖貴社長は「元理科室だから水回りが充実していて助かる」と話す。

少子化による廃校は首都圏も例外ではない。

宿泊施設や保育施設のある「篠原の里」は地域の活動拠点となっている（相模原市）

神奈川県の最北西に位置する相模原市の旧藤野町は山に囲まれた自然豊かな里山地域。開校130年の篠原小学校が廃校となり、地元住民らでつくるNPO法人「篠原の里」が05年から活用して日帰り・宿泊研修施設と認定保育室を運営する。

21年度の施設利用者は約2200人、宿泊者数は約260人。東京からの利用者も多い。ホタル観察のほか、バーベキューや石窯を使ったパン・ピザ作りが人気という。地元住民のサークル活動の拠点としても使われており「地域の中心施設」となっている。

国産スギ材で作った0～2歳児専用の「赤ちゃん木育ひろば」（東京都新宿区の「東京おもちゃ美術館」）

東京都新宿区では学校の統廃合で100年の歴史に幕を閉じた旧四谷第四小学校が交流施設「四谷ひろば」へと生まれ変わった。地域住民中心のボランティアらで構成する協議会が管理・運営する。世代を超えた交流の場にと「東京おもちゃ美術館」を誘致した。

新宿区は旧四谷第五小学校にも、歌舞伎町の大衆文化を再興させる事業の一環で、吉本興業東京本部と関連会社を誘致。区の担当者は「発信力や創造力、コンテンツが区政に大きく寄与している」と話している。

（苅谷直政、本田幸久、仲村宗則、鈴木菜月）